

泉屋博古館
SEN-OKU HAKUKOKAN MUSEUM

住友コレクションが

かつて

展覧会場で

放った輝き、

邸宅を

飾った彩り。

続・帰ってきた

(リニューアル記念名品展Ⅱ)

泉屋博古館

近代の美術、もうひとつの在り方

Grand Reopening Masterworks Exhibition II
Return of SEN-OKU HAKUKOKAN MUSEUM
-Other Forms of Modern Art in Japan-

同時開催
ブロンズギャラリー
「中国青銅器の時代」



2025
6/21 [土] - 8/3 [日]

木島櫻谷(燕子花図屏風)、池田泰真(野菜盛籠図屏風)、板谷波山(彩磁更紗花鳥文花瓶)、戸島光宇(桜垂桜紋手箱)、原田百湖(乾坤再明図)、初代三浦竹久(露草風式花瓶)、二代井上良策(磁土古髹置物)。すべて泉屋博古館東京所蔵。* 展示替えあり。

2025年6月21日(土) ~ 8月3日(日)

リニューアル記念名品展Ⅱ

続・帰ってきた泉屋博古館

～近代の美術、もうひとつの在り方～

展覧会概要

リニューアルオープンを記念して、当館所蔵の近代美術の名品を一堂に公開いたします。近代の美術というと、必ず取り上げられるのが展覧会で華々しく発表された大作の数々です。作家が技を尽くして挑んだ展覧会出品作は、新時代の表現を切り開いてきました。住友家の当主も、彼らの冒険心に理解を示し、多数集めています。しかしそれだけが住友の近代美術を代表する作品ではありません。たとえば、来客をもてなす場を飾るために注文された作品。制作を依頼した当主の美意識に応えようとする作家たちの挑戦は、招かれた客人の心を動かしたはずです。あるいは、仲間との交流のなかで生み出された作品。江戸時代から続く文人趣味の土壌に育まれた作品には、同好の士が集ったときの居心地の良い空気が漂います。住友コレクションをひもとけば、近代美術の多様だった在り方に気付かされ、さらにそれが今を生きる私たちに、美術をどう楽しむのか問いかけてきます。

基本情報

展覧会名	リニューアル記念名品展Ⅱ 「続・帰ってきた泉屋博古館 ～近代の美術、もうひとつの在り方～」
会期	2025年6月21日(土)～8月3日(日)
会場	泉屋博古館 〒606-8431 京都市左京区鹿ヶ谷下宮ノ前町24 TEL 075-771-6411(代表) HP https://sen-oku.or.jp/program/20250621_renewal2/
休館日	月曜日、7月22日(火) ※7月21日(月・海の日)は開館
開館時間	午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
入館料	一般1,000円(800円) 学生600円(500円) 18歳以下無料 ※学生ならびに18歳以下のかたは証明書のご呈示が必要です ※20名以上は()内の団体割引 ※障がい者手帳等ご呈示のかたはご本人および同伴者一名まで無料
主催	公益財団法人 泉屋博古館、日本経済新聞社、京都新聞
後援(予定)	京都市、京都市教育委員会、京博連、公益社団法人京都市観光協会、NHK京都放送局
同時開催	ブロンズギャラリー「中国青銅器の時代」

住友の近代美術、京都へ帰省

普段は泉屋博古館東京に所蔵されている近代美術の名品が、京都へ里帰り。絵画、彫刻、工芸とジャンルを超えて作品を精選し、住友コレクションの近代美術の魅力をダイジェストでお伝えします。板谷波山、木島櫻谷の代表作はもちろん、今まで京都ではなかなかご紹介する機会に恵まれなかった作品も一堂に会します。名品との久しぶりの出会いも、意外な作品との新鮮な出会いにも、ご期待ください。



板谷波山《葆光彩磁珍果文花瓶》
大正6年(1917)、泉屋博古館東京

青色の毘沙門亀甲文を地文とするこの壺は、胴部がゆったりと張って、そこに白く窓が抜かれています。その中に描かれているのは籃に盛られた、たわわに実った枇杷。その黄金色の実、富の象徴として尊ばれてきました。また枇杷は、寒さ厳しい冬に花を咲かせる数少ない植物として、その可憐な清らかさが文人たちに愛されました。本作にはその他に、鳳凰、羊、魚など東洋の吉祥モチーフが配されています。これら吉祥に充ち満ちた全体の隅々にまで掛けられているのが葆光釉。「葆光」という言葉通り、ぼんやりと包み込んだような光が、モチーフを淡く浮かび上がらせる幻想的な大作です。

尾形光琳《燕子花図屏風》から大きな学びを得た作品で、濃厚な彩色で燕子花の群生を鮮やかに描き出しています。しかし、一つ一つの花はわずかに姿を変えて描写し、さらには葉っぱ同士の重なりもさりげなく表現して自然な奥行きを画面にもたらしめています。そこには確かに、光琳より後の時代に生まれた円山応挙にはじまり、近代の京都画壇にまで脈々と継承された写生の精神が感じ取れます。



木島櫻谷《燕子花図屏風》 大正6年(1917)、泉屋博古館東京 ※展示期間 6/21~7/21

東京館の象徴展示として日々すべての展覧会を見守っている北村四海《蔭》も、今回ばかりは帰ってきた!!



泉屋博古館 東京ホール

撮影：田口葉子



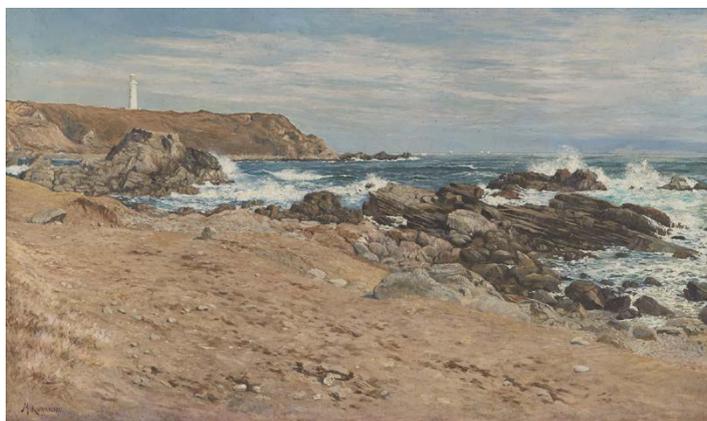
北村四海《蔭》
明治44年(1911)、泉屋博古館東京

物憂げな表情でうつむく女性。その肌はなめらかに掘り出される一方で、周囲には荒々しい削り跡が残ります。この静と動、柔と剛の対比が、女性像にヴィーナスたらしめるような不思議な神秘性を持たせています。

大阪と博覧会 一切っても切れない関係の「原点」

EXPO2025 が開催される大阪。実は大阪の発展の歴史の裏には、70 年万博をはじめ「博覧会」の存在が見え隠れします。そうした大阪と博覧会の関係のはじまりは約 120 年前にさかのぼります。明治 36 年 (1903) に大阪・天王寺で開催された第 5 回内国勸業博覧会は、第 1～4 回と同じく国内産業の振興・展示披露の場でありつつ、イギリスやフランスなど海外十数カ国から出品があったことは特筆に値します。外国の参加は内国博覧会にとって初めてのことで、さながら万国博覧会の様相を呈しました。さらには夜間開場のイルミネーションが話題を呼ぶなど、前例にとらわれない数々の仕掛けが大きな注目を集め、内国博覧会史上最大の入場者数を記録しました。この大阪での成功体験が、後に日本が万博誘致へ動ききっかけとなりました。このときの遺産として天王寺公園などが今も残っていますが、住友コレクションにもこの博覧会に出陳されていた作品が多数残されています。EXPO2025 の開催を記念して、大阪と博覧会の切っても切れない関係の原点とも言うべき第 5 回内国勸業博覧会の出陳作を住友コレクションからご紹介します。

岩に押し寄せ砕け散る白波と色褪せた陸地。さらに空も遠く、画面奥へいくに従い雲の厚さが増しているようで、寒々しい荒磯を描き出しています。台地の上にすくと立ち上がっているのは白亜の燈台。本作は、房総の犬吠埼を描きます。第 5 回内国勸業博覧会の出陳作で、その後住友家に入りました。



河久保正名《海岸燈台ノ図》明治 35 年 (1902)、泉屋博古館東京



二代井上良斎《巖上白鷲置物》
明治時代 19 世紀、泉屋博古館東京

瑠璃釉の発色美しい岩塊の上に白鷲が留まっています。鷲は、首を横に向けて眼光鋭く睨み付ける勇猛な姿で表されています。釉薬は掛けられておらず、素地がそのまま見えており、艶やかな岩塊とは対照的です。本作は陶土を素材にした彫刻作品であり、その技巧の高さは第 5 回内国勸業博覧会の出陳作にふさわしいものです。



三代清風与平《青磁瓜虫彫文花瓶》
明治 36 年 (1903)、泉屋博古館東京

中国青磁の世界では理想的な発色を空の青さにたとえてきました。本作は京都で焼かれた京焼ではありますが、中国青磁伝統の清澄な青色に憧れ、追い求めてつくられたものです。胴部には、瓜の実にかたつむりやトンボなどの虫が集う様子が浮彫で表現されています。第 5 回内国勸業博覧会出陳作です。

また、本展の関連イベントとして、博覧会と住友のこれまでの歴史をたどる講演会を牧知宏氏（住友史料館主席研究員）をお招きして開催いたします（詳細は 7 ページ）。

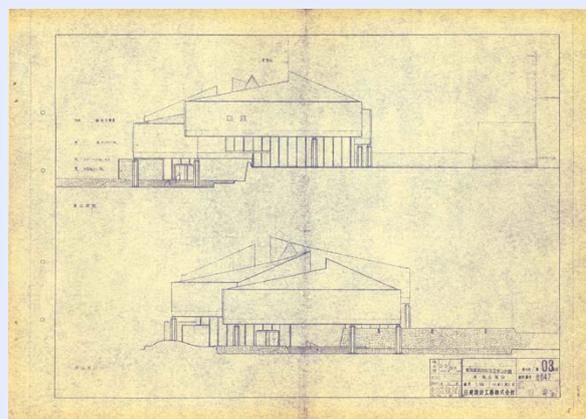
久しぶりに万博が国内で開催される本年だからこそ、博覧会と都市、産業、企業、そして美術との関係について考えてみたいと思います。

再始動する山麓の美術館

大阪と博覧会の関係を語る上で忘れてはならないのが、EXPO1970。京都東山の山麓に佇む当館1号館も、実は1970年の大阪万博開幕に合わせて誕生したのです。当時、住友グループは千里丘の万博会場に「住友童話館」を建設していましたが、それとは別に、いわば「私的パビリオン」というべき施設を京都・東山の地に建設し、万博を訪れた国内外の賓客をもてなす計画を練りました。それで誕生したのが、現在の泉屋博古館の1号館です。単なる迎賓館ではなく、住友コレクションを代表する中国古代青銅器の永続的な収蔵・展示機能を持たせることを建設意図の根幹に据えました。その結果、仮初めの「パビリオン」として姿を消す運命にあった千里の施設とは対照的に、中国三千年の歴史を脈々と伝える青銅器を抱きながら1号館は今日までほぼ姿を変えずに残ってきました。さらに今回のリニューアル工事では、より一層開館当初の姿に戻そうと様々な工夫を施し、次の五十年、百年を目指します。往時の万博の熱狂を今に伝える施設として、改めて建築にもご注目ください。



泉屋博古館1号館竣工写真 昭和45年(1970)



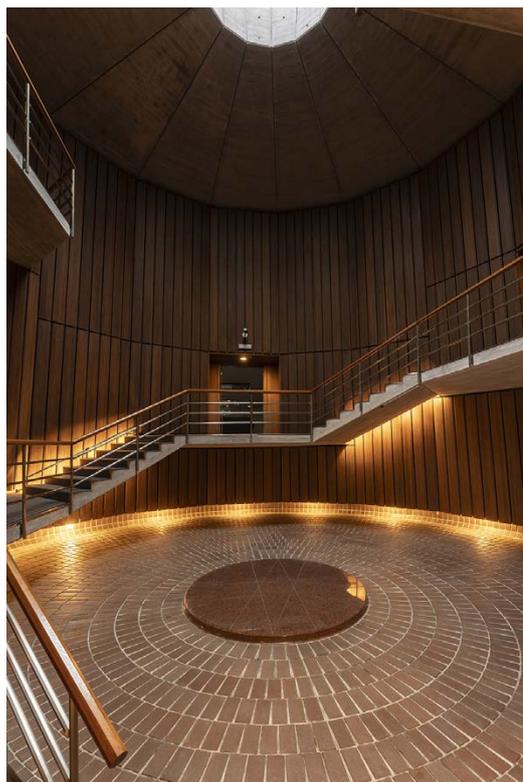
小角亨「泉屋博古館1号館新築工事設計図(東・南立面図)」昭和43年(1968)

現代の日常生活から古代中国の神話世界へ、一気に心を切り替えるのはなかなか困難です。そのために、建築家が用意したのがこの1号館ホールです。来館者が一段一段階段を踏みしめるうちに心を静めて青銅器と対峙する準備を整えられるようにとの思いが詰まった設計です。平成のバリアフリー工事ではこのホールにエレベーターを設置しましたが、この度の令和のリニューアル工事で別にバリアフリー動線を用意して移設したことで、象徴空間としての機能を取り戻しました。



リニューアル前

撮影：守屋友樹



リニューアル後 (令和7年(2025)撮影)

撮影：守屋友樹

近代美術の、「もうひとつの在り方」とは？

明治時代、西洋から「展覧会」という仕組みがやって来ると、同時代の美術の在り方を変質させていきます。大きな部屋で、他の作家の作品と並べられ、不特定多数の人に観覧される「展覧会」では、自然と「大会場映え」が志向されていきます。さらに審査褒賞の制度を設けたことで、作家たちの制作意欲を刺激する一方で、美術界での「立身出世」の型が定まっていきます。美術館やコレクターが作品を蒐集する際も展覧会での評価が重視され、批評家や研究者も展覧会出品作を基準に歴史を紡いでいきます。こうして今日私たちが「近代美術」と呼んでいる作品の王道とも言うべき在り方が決まってきました。当然、住友コレクションにもこのような展覧会で評価された作品が含まれています【第1章】。

しかしながら住友コレクションには、こうした王道的な在り方とは異なる文脈で制作、鑑賞、蒐集された近代美術の作品が数多く収められています。これを本展では、「もうひとつの在り方」と名付けてご紹介します。たとえば、同好の仲間が集ったときに制作された作品、あるいはそうした仲間の存在を前提として生み出された作品です。住友コレクションの場合は、代々の当主が漢籍や東洋の美術に親しんできた伝統が下地となって、文人趣味の作品が多数残されています。こうした中国文化への造詣と憧憬を共通基盤とする、いわば閉ざされたグループにおいて楽しまれた作品には、不特定多数を相手にしなけりなかつた展覧会用の作品とは異なる美の発露が見られました【第2章】。

さらに他にも、コレクターが具体的な何か用途を念頭に置いて集めた作品が想定されます。住友の場合は、屋敷に招いた賓客の目を楽しませるための部屋の装飾品として集めています。なかには、作家に直接注文するような形で制作された作品も含まれ、作家には展覧会出品のときとは異なって、使用場面を想定しつつ注文主の美意識に呼応していく能力が求められました。注文主にとっても作家の美意識に共感を示し支援を重ねていくことを意味し、双方の間に交流が生まれていたことが想像されます【第3章】。

魅力的な近代美術の作品は、決して展覧会場だけで生まれたわけではないということ、逆説的ではありますが本展覧会を通して感じ取っていただき、両方の性質を合わせ持つ住友の近代美術コレクションの面白さをご紹介できれば幸いです。

展示の章立て(予定)

第1章 「展覧会」で映えるには

第2章 類は名作をもって集まる

第3章 空間を飾る、客人をもてなす



第2章

岸田劉生《塘芽帖》※頁替えあり
昭和3年(1928)頃、泉屋博古館東京



第3章

板谷波山《彩磁更紗花鳥文花瓶》
大正8年(1919)、泉屋博古館東京



第1章

富田范溪《鰻籠》大正3年(1914)、泉屋博古館東京
*第八回文展出陳作



第1章

山崎朝雲《竹林の山濤》
大正元年(1912)
泉屋博古館東京
*第六回文展出陳作

会期中の催し

講演会 EXPO2025 開催記念講演会「博覧会と住友」

牧知宏氏（住友史料館主席研究員）

7月20日（日）午後2時開始（90分予定）

先着予約制（6月21日10時より受付開始） 当館WEBサイトにて受付

○企画学芸員からひとこと

大阪・関西万博にパビリオン「住友館」を出展している住友グループですが、住友と博覧館のつながりは古く、明治時代まで遡ります。その長い歴史を一気に駆け抜け通覧すべく、住友史料館の主席研究員でいらっしゃる牧知宏先生をお招きし、お話をお伺いします。勝手に想像するにおそらく、戦前の博覧会の様子を貴重な古写真なども交えながら、今日に至るまでの博覧会・万博と住友の歩みをご紹介いただけるものと楽しみにしています。

スライドトーク 「住友コレクションの“美術家列伝”」シーズン1

「やっぱり知りたい狩野芳崖」 椎野晃史（泉屋博古館東京主任学芸員） 6月28日（土）

「みんな知っている板谷波山」 森下愛子（泉屋博古館東京主任学芸員） 7月5日（土）

「だれも知らない河久保正名」 野地耕一郎（泉屋博古館東京館長） 7月21日（月・海の日）

「知っている人は知っている野口小蘗」 田所泰（泉屋博古館東京学芸員） 7月26日（土）

各回午後2時開始（60分予定）。予約不要。当日午前10時から当館受付にて整理券*配布。

午後1時30分開場。座席は先着自由席。

*整理券をお持ちの方は、発行当日に限って再入館が可能です。

○企画学芸員からひとこと

住友コレクションを彩る美術家たち—すでに有名な人も、まだ世に知られていない人も様々ですが、近代美術を日々研究・展示している泉屋博古館東京の学芸員4人がそれぞれの視点から今語っておきたい作家を4人厳選しました。住友コレクションが特定の作家の人生を追いかけるような蒐集にはなっていない以上、展示だけではどうしても迫りきれないそれぞれの作家の横顔や制作歴について補ってもらえるものと、勝手に期待しています。一話完結型ですので、どの回でもお気軽にお越しください。

展示解説

7月2日（水）、7月11日（金）、7月31日（木）

竹嶋康平（当館学芸員）

各回午前11時開始（40分予定）。予約不要。当日午前10時から当館受付にて整理券配布。

10時45分開場。座席は先着順自由席。

○企画学芸員からひとこと

展覧会の見どころ、展示作品の魅力をぎゅっと凝縮してお伝えいたします。

ふらっと泉屋八景めぐり 学芸員ガイドツアー

7月18日（金） 午前11時開始 定員15名 予約不要・先着順

展示や美術作品だけでなく、少し懐かしさを覚える昭和レトロな建築、東山を借景に取り込んだ緑美しい庭園も楽しんでいただきたい当館。その魅力をお伝えするため、館内8ヶ所の「景勝」をめぐり、ガイドいたします。

泉屋八景とは？

リニューアルを期に泉屋博古館の魅力を見つめ直すべく、館内の優れた景観を8カ所選定し、東洋の景観鑑賞の伝統になぞらえて、「泉屋八景」と名付けることにしました。以前からお客様が写真撮影をして楽しんでくださっていたスポットから、まだ知られてないけれど「ここはいい！」と中の人間が太鼓判を押すスポットまで織り交ぜてご紹介します。八景めぐりに最適な特製マップも作成予定ですから、ガイドツアーがない日でもご自由に巡遊をお楽しみいただけます。

New!



野帳 (泉屋博古館 1号館)

泉屋博古館オリジナルデザインの「測量野帳」が誕生!

1970年から変わらぬ佇まいでみなさんをお迎える、泉屋博古館の顔・1号館を箔押し加工であらわしました。上空から見下ろすと風車のように見える、特徴的な形の屋根が金色に輝きます。どっしりとした柱やアシンメトリーな造形など、1号館の建築的な魅力が凝縮されたデザインです。

コクヨのロングセラー商品「測量野帳」は、薄型&軽量で持ち運びにぴったり。丈夫な表紙を活かして立ったまま書けるので、展覧会で出会ったお気に入りの作品をメモするもよし、ふとひらめいたアイデアを書くもよし。さらに、チケットの半券を貼ることができるサイズなので、展覧会記録や日記にも最適です。リニューアル後の泉屋博古館のあゆみと日々の発見を、ぜひこの野帳に書き留めてください。



1号館 外観

東京館の人気商品もやってきます



定番ロングセラー



ふきん

(板谷波山《葆光彩磁珍果文花瓶》)

奈良特産の蚊帳生地を使用した手触りのよい岡井麻布商店のふきん。板谷波山の代表作のひとつ、重要文化財《葆光彩磁珍果文花瓶》の珍果文(桃・葡萄・枇杷)の吉祥モチーフとともに、作品にさまざまな字体であしらわれている「寿」「福」の文字をパターンにしています。実用性とめでたさを兼ね備えたイチオシ商品。おみやげ・プレゼントにもおすすめです。

好評につき
再販決定!

文香

(木島櫻谷《燕子花図屏風》ほか四季連作)

手紙に添えたり・ポチ袋に入れたり・お財布に入れたり・名刺入れに入れたり・ポーチに入れたり…。一緒にいれたものにほのかに香りをうつすことのできる、使い勝手の良いお香です。木島櫻谷の四季屏風をモチーフにした4つの香包の中には、泉屋博古館東京をイメージし、麻布十番の香木・香道具専門店「麻布香雅堂」にブレンドいただいたオリジナルのお香が入っています。玉蘭リーフ(精油)の甘やかなかおりと、白檀のウッディでやさしい香りがまざりあった、和と洋の間を漂うような特別なバランスです。



香

麻布 香雅堂

交通アクセス

- 京都市バス JR・新幹線・近鉄電車「京都駅」／京阪電車「三条駅」から5系統
阪急電車「烏丸駅」から32、203系統
地下鉄烏丸線「丸太町駅」から93、204系統
5、93、203、204系統：「東天王町」下車、東へ徒歩200メートル
32系統：「宮ノ前町」下車すぐ
- 地下鉄 東西線「蹴上駅」から徒歩約20分



〔問い合わせ先〕 泉屋博古館 広報担当 坂井さおり pr-kyoto@sen-oku.or.jp

電話 075-771-6411 FAX 075-771-6099 HP <https://sen-oku.or.jp/kyoto/>



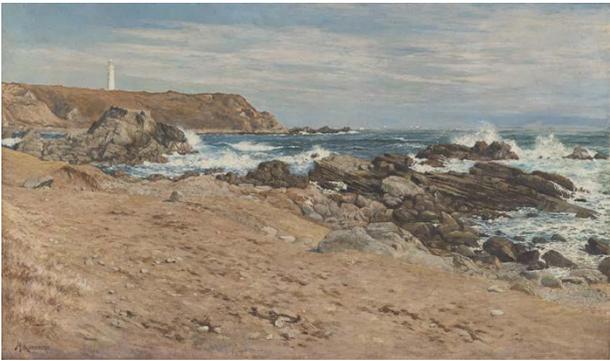
板谷波山《葆光彩磁珍果文花瓶》
大正 6 年 (1917)
泉屋博古館東京



木島櫻谷《燕子花図屏風》
大正 6 年 (1917)
泉屋博古館東京 ※展示期間 6/21～7/21



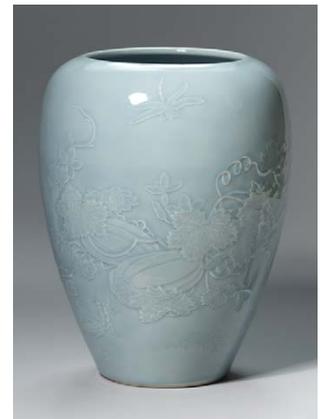
北村四海《蔭》
明治 44 年 (1911)
泉屋博古館東京



河久保正名《海岸燈台ノ図》明治 35 年 (1902) 泉屋博古館東京



二代井上良斎《巖上白鷺置物》
明治時代 19 世紀
泉屋博古館東京



三代清風与平《青磁瓜虫彫文花瓶》
明治 36 年 (1903)
泉屋博古館東京



富田范溪《鰻籠》大正 3 年 (1914) 泉屋博古館東京



板谷波山《彩磁更紗花鳥文花瓶》
大正 8 年 (1919)
泉屋博古館東京



山崎朝雲《竹林の山濤》
大正元年 (1912)
泉屋博古館東京



岸田劉生《塘芽帖》昭和 3 年 (1928) 頃 泉屋博古館東京